

[講演要旨] 「理科年表・日本付近のおもな被害地震年代表」の変遷

東京大学地震研究所 瀧瀬 一起
 日本大学文理学部 吉井 敏尅

§ 1. はじめに

理科年表の第1冊(大正 14 年版)が発行されてから 80 年を経過し, 地震の部(現在は地学部・地震)も筆者らまで 7 人の監修者を経ている. その間の変遷について, 昭和 50 年版までは宇佐美(1975)によりまとめられているが, それ以降を含めた全体のまとめをここで行ってみたい. ただし, 地震の部全体はやや荷が重いので, 部の中心的な存在である「日本付近のおもな被害地震年代表」に限るとともに, 被害地震の標準データセットとして使われることの多いこの年代表のデータの均質性を, 監修者の個性を含めて議論したい.

§ 2. 年代表の変遷

年代表の変遷は「地震学の裏から見た発展史」(宇佐美, 1975)であるが, その時々々の政治情勢の反映でもある. 1925 年から 1943 年までは「本邦大地震年代表」と呼ばれていて, 本邦=内地+琉球+台湾+朝鮮と定義されていた. 戦後, 年代表の名前は「本邦および隣接地域大地震年代表」と変わったが, 対象領域のこの定義は 1970 年まで引き継がれていて, 1971 年からようやく「日本付近の・・・」となった. また, 監修者の個性も採録地震数の変遷に大きく影響する. 交代の直後に大きく変化するのは過去に遡って見直しが行われた結果だが, 担当途中で地震数のふえ方は監修者の採録基準によるところが大きい. こうした基準の主観的变化はデータの均質性に影響を与えるので, 2005 年版から「死者 1 名以上または家屋等の全壊(潰)1 以上または津波規模 1 以上」という客観基準を導入し, 1885 年まで遡って適用した. この結果, 今村明恒が担当期間中に採録した地震のうち 3 件が削除され, 1 件が追加された. 同様に松沢武雄(-2 件・+1 件), 河角広(-3 件・+0 件), 萩原尊礼(-0 件, +0 件), 宇佐美龍夫(-9 件, +1 件), 吉井敏尅(-1 件, +3 件), 瀧瀬一起(-0 件, +1 件)であり, 宇佐美龍夫の元の採用基準は緩く, 吉井敏尅のそれは厳しかったとみることができる.

年	1925	1929	1930	1932	1934	1935	1937	1940	1943	1947	1948	1949	1951	1952	1953	1955
地震数	312	318	318	321	323	323	326	334	337	347	417	417	418	419	419	420
監修者	今村明恒	←	←	←	←	←	松沢武雄	←	←	←	河角広	←	←	←	←	←
年	1956	1957	1959	1960	1962	1964	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974
地震数	420	420	420	420	501	501	511	511	512	512	516	519	412	416	417	419
監修者	←	←	←	←	←	←	←	萩原尊礼	←	←	←	宇佐美龍夫	←	←	←	←
年	1975	1976	1977	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1989	1990	1991
地震数	420	421	423	424	424	427	427	428	428	429	431	433	433	428	428	428
監修者	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	吉井敏尅	←	←	←	←
年	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005		
地震数	428	428	430	430	433	433	433	433	433	433	436	436	438	412		
監修者	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	瀧瀬一起	←	←	←	

§ 3. 関東地震の記述

宇佐美(1975)にならって関東地震の記述から年代表の変遷を見ると, 1948 年から地震の規模を表す等級(関東地震は 4)が導入され, その後 1952 年からマグニチュード(同 7.9)に置き換わっている. これはまさに地震学の発展史といえよう. 被害摘要は 1971 年から宇佐美龍夫による詳細な記述となり, 1989 年に吉井敏尅が表現の微修正を行ったが, 死傷者数や全半壊数など被害の数値は今村明恒が 1926 年に書いたものから一貫して変わっていなかった. しかし, 2006 年版では諸井・武村(2004)の数値に置き換える予定である.